

開催地名	三重県 熊野市
開催日時	令和6年12月6日(金)13:30~15:00
開催場所	熊野市立飛鳥中学校 体育館
語り部	吉田 亮一(宮城県仙台市)
参加者	34名(中学生21名、本校教職員9名、近隣小中学校教職員3名、自主防災会長1名)
開催経緯	南海トラフ地震で被害が予想されるが、実際にどのようなことが起きるのかイメージが難しい課題がある。吉田亮一さんから避難所運営体験の紹介を受け、被災地からの実体験を交えた講話を直接聞く機会は有効であると考えた。
内容	(1)はじめに 前回、地元の中学生・高校生という立場ではなく地域の一員であるという自覚を持つことが、防災の一つの基本であり非常に重要であることを話した。地域の一員である自覚と普段からの行動が、災害時に生きてくるからだ。 また、地球は生きている。その中で、災害への危機感を持つことは非常に大切である。 (2)防災対策 普段からどのような備えが必要かを考えるべきだ。例えば、食糧・水は最低1週間分の用意をすべきである。地震が発生してから購入では遅い。 また、断水したらお皿は洗えなくなる。その場合は、サランラップを巻いてお皿を使用すると洗う必要がなくなり水が不要となる。スーパーで販売されているお惣菜用に使われているトレイなどを再利用するのも良い。 枕元には防災用品6点セットを準備して欲しい。防災用品6点セットとは、 ① 靴下 ② スニーカー ③ ヘッドライト ④ 防犯ブザー ⑤ 携帯ラジオ ⑥ フード付き雨具 である。 大地震発生時には、揺れが収まった後すぐに靴下とスニーカーを履いて、ヘッドライトを付けて足を怪我しないように避難する。なぜなら、足を怪我してしまうと遠くや高台へ逃げる事が出来なくなってしまうからである。併せて、防災マップをしっかりと確認するべきである。 また、前回も想定以上の備えをすべきだと話した。例えば、10メートルの津波警報が発せられたときは、15メートル安全な場所に逃げなければならない。なぜならば、10メートルの津波の上に建物や車などの瓦礫類が浮かび、それらが一緒になって我々に迫ってくる可能性があるからである。相手は自然であり予測が出来ないため、想定以上の備え・行動が重要となってくる。 (3)避難所運営体験 生徒たちは、設営班・避難誘導班・受付班・総務班・物資班・衛生班・炊き出し班・情報班の各グループに分かれた。体育館にブルーシートを敷いて避難スペースを作ったり、救援物資に見立てた箱を種類別に並べたりして避難所の設営を実際に行った。 そして、設営が完了した時刻の記録を行ったり、救援物資の内容・数を紙に書き出したり、新聞からの情報をまとめたり、お米を炊き出したり、避難所の受付を行うなどをして、避難所での運営を楽しみながら実践的に学んだ。 (4)最後に 「いつも皆が助け合い協力をして、命の大切さと人を思いやる気持ちで仲良く暮し、災害に勝ちましょう。」これが非常に大切な基本である。 このことを守らないと、災害に勝つことは出来ない。普段の生活から、塾でも部活でも学校でも会社に入っても結婚して家族を持っても、この基本を忘れずに必ず守って欲しい。

	
開催地より	大規模地震発生時において、海岸部など甚大な被害を受けたところの避難所運営が大変だと思っていた。しかし、さほど被害がない地域は大人が仕事に出て行ってしまう、子どもと高齢者だけで地域を守らなければならないため、避難所の運営に大変な苦労があったことを実感できた。今後の防災意識向上に役立てたい。